横浜市小学校社会科研究会

５学年部会

研修会記録

第　６　号

令和４年　12月　７日
横浜市小学校教育研究会
会長　　徳江　武司
横浜市小学校社会科研究会
会長　　加藤　和之
同　学年部長　　宮原　美由紀

【提案日時】
11月　２日（水）

【会　場】
横浜市立　　平沼小学校

提案	笠井　俊充	先生（永田台小）
司会	杉内　翔太	先生（大豆戸小）
記録	三浦　　智	先生（高舟台小）
提案	永澤　　大地	先生（本牧小）
司会	宮原　美由紀	先生（白幡小）
記録	園山　　和寛	先生（永谷小）

永田台小　笠井先生

１　提案内容　単元名

単元名「森林とともに生きる
～カートカンから考える森林の未来のためにできること～」

２　提案者より

〇本気の学習問題の成立過程

→林業や、国や県の取組、カートカンの製造工程やカートカン製作を20年以上行っているSさんの活動を知る中で、なぜ20年以上活動を行っているのかを考えるようにしていきたい。

「10%しか使えないのにSさんはなぜ、20年以上も続けているのか。」を中心発問として、Sさんの「消費することで意識をもてるようにしている」という思いに迫れるようにしたい。

学習問題を２段階で行っている。２つ目のＳさんの思いに迫れるようにしていきたい。

〇意見の根拠となる資料の提示

資料①　カートカン(国産材30%)と牛乳パック(外国産材100%)の値段の比較
資料②　カートカンの流通量がわかるもの→普及率や販売本数
資料③　当日子どもたちが手に取って考えることができるようにした。

〇カートカンについて

間伐材が10%以上配合されていると間伐材マークを使える。配合が高くなっていくと管理費などで値段が上がってしまう。
頑丈な容器をつくろうと思って、たどり着いたのが国産材30%、外国産材70%。
結果的に環境にいいものになった。

３　協議会

〇学習問題について

・「どうして10％しか使わないのか。」を学習問題にすると成分の割合についての話が中心になってしまわないか。

・最初から、２つ目の発問を学習問題にしていくといいと思う。本時の中で、改めて考えていくことは、難しい児童もいるのではないか。また、研究視点としても「みとり」がある。前時で子どもたちの考えをみとったうえで本時の流れにつなげていけるといいのではないか。

〇子どもの思考について

・子どもたちの予想に広がりがあるのか心配。

→森林を守るために。カートカンを普及させたい。間伐材の利用を意識してほしい。

・「10％は、環境にいいのか？」「20年続けている」という２点で矛盾が生じるところから考えを深めるという切り口もある。

→10％でも意味があるという根拠。→認知率の上昇。参加企業の増加。

・これまでの累積の消費本数を資料とするのもいいと思う。これまで積み重なってきているということが、Ｓさんの活動の成果として見えてくるのではないか。

・続けることに意義がある活動ではないのか。１％でもＳさんの考えとリンクしていることに気付けるといいのではないか。森林の保全という視点から考えると、そのときだけでもだめだし、多すぎてもだめ、という点に着目させたい。

・本時に至る過程がとても重要ではないか。森林の役割や林業のこと、間伐が必要不可欠であり、間伐したものを利用していかないと困ること、Ｓさんの活動内容やボランティアであることをしっかりと理解しておきたい。そのうえで、本時について考え、これまでの学習とつなげながら森林の保全に努めていることを考えさせたい。

・「20年以上続けているのだろう」という視点だと子どもの予想とＳさんの発言が似たようなものになってしまうのではないか。普及率が１％だったものが今ではどうかと考えたときに増えているだろうという予想と実際の数字にズレが生じる。

・これまでの学習の視点も根拠になっていくといいのではないか。リサイクルの視点であったり、水産資源を守ることに視点であったり、限りある資源を大切にしていく考えとつなげていきたい。

本牧小　永澤先生

１　提案内容　単元名

単元名「未来を作る情報産業～N局の番組作り～」

２　提案者より

〇「本気の学習問題」について

・N局の記者が多くの時間をかけて取材して情報発信をしているという部分を取り上げたい。また、正しい情報を発信することと速さについて伝えたい。

・記者の思いに焦点を当てて、子どもたちに伝えるのは難しいから、時間や量で伝えたい。

〇本時の流れについて

・本時ではN局の記者が熊本地震での取材の事例をもとに話し合う。
・前単元の自然災害の学習と本時で扱う熊本地震と関連させることができる。
・色々な情報の伝え方を知り、本時では緊急性の報道等という視点で間口を広げる。

３　協議会

〇本時の流れについて

・報道の正確性、わかりやすさは前時で学習し、本時では報道の速報性に着目させる。
・熊本地震の話題をどの場面で子どもにふるのかを吟味する。
・本時の課題はN局にするか、人にするか調整して決める。
・災害によって伝え方が変わる。状況に応じて伝え方が変わる。

〇情報の送り手と受け手

・情報を発信する側だけではなく、受け手側にも想像力が必要だということを子どもが考えることが必要ではないか。
・受け取った情報によって受け取り側がどう判断するかも考える必要がある。

〇体験活動について

・社会科見学の目的について、体験できた喜びを大切にしたい。番組制作について知り、そこで得た知識や体験をもとに、見学で得た視点を本時につなげる。

＜講師の先生より＞　大曽根小学校　宮本　雅司　校長先生・宮谷小学校　鳥山　真　校長先生

森林とともに生きる

単元目標を意識してほしい。Sさんの働き、営みから単元目標につなげていけるとよい。普及率が１％だったり、間伐材が10％の配合だったりしても、その収益が植林などの活動を支えているのであれば、国土の保全に大きくかかわっていることになる。カートカンはエコに関する農林水産大臣賞を受賞するなど国も認めている。間伐などの手入れをしないと国土の保全がされていかない。森林に関して今まで学習したことを根拠としてSさんが20年以上も続けていることの考えを話せるといいのではないか。

事実を掴んできた中で子どもたちのつぶやきを大切にする。そこからみとっていき、「20年以上も続けている」と「１％しか普及していない」のどちらを本時の学習問題にするのかを選んでいってほしい。子どもの声を大切にしながら単元を進めていき、単元のねらいに迫っていけるようにするとよい。

未来を作る情報産業

記者が取材を重ねることの大切さと、その情報に疑いをかけるという視点を伝えることも大切である。どこで何が起きても、正確に速く報道できることも大切な視点。記者がその事実について取材を重ねることの根拠は何かを追究していくとよい。学習を積み重ねていく中で、子ども達が何にひっかかるのかを考えながら学習課題をつくっていくことを意識してほしい。

文責　　田澤　哲哉　（常盤台小学校　）